

## 『税』があるから

千歳市立富丘中学校 三年 時田 茜

夢を見た。それは、何気ない日常のごく一部だと思っただけ、いつもとは違う気がした。学校に向かう子どもの数が、いつもと比べて少なく感じた。家の近くの公園があった場所は、何もない空き地だった。この前の工事で綺麗になったはずの道路がガタガタで、川にかかった橋もとても安心して渡れそうになかった。それに、当たり前のようにあったはずの公共施設が、どこにもなかった。

救急車の音。言い争う声。向かいの家には、老夫婦とその娘夫婦が住んでいる。家の前の道路に誰かが倒れているように見えた。そういえば、さつき通りかかった若い夫婦が、こんな話をしていた気がする。

「病院に行くのもお金がかかるし、学校に通うのだけってお金が凄くかかる。救急車もお金がかかるから簡単には呼べないし。あの橋も危険で渡れない。いつになったら安心して暮らせるんだろう。」

「仕方ないよ。税金があった頃は、もっと不自由なく暮らせていたけど……。」  
見知らぬ人の会話なのに妙に『税金』という言葉が、脳裏に焼きついて離れなかった。

夢をみていた。あれはきつと、税金がない未来。この公園も、道路も、橋も、公共施設も、全部、ぜんぶ当たり前じゃない。風邪をひいただけで病院に行けるのも、小学校を卒業するのも、小学校を卒業したら中学生になるのも、全部、ぜんぶ当たり前じゃない。『税金』がなかったら、道路や橋の整備なんてされないし、小学校や中学校だってお金が凄くかかるから、お金に余裕のある家庭じゃないと通うことはできないと思う。救急車だってお金がかかるから、助からない命だつてあるかもしれない。本当にこれが、私たちが望んだ未来だったのか。

夢を見すぎていた。

「税金がなかったら良かったのに。」

と、何度も口に出したことがある。欲しいものを買ったときにかかる消費税が、少しうざったらしく思えたからだ。でもそれは、意味のないものでも必要のないものでもなく、私たちが安心して暮らすための大事なものだ。言うならば、私たちが『税金』で『当たり前前の安心と日常』を買っている。そう考えると、『税金』を払うだけで安心した暮らしができるなんて、得をしていると思う。

夢を見た。それは、何気ない日常のごく一部、公園から聞こえる子どもたちの笑い声。整備されたばかりで綺麗な道路と橋。幸せそうな若い夫婦とランドセルを背負った子どもたち。いつもと違うところなんてひとつもなくて、当たり前前の普通の日常。

夢を見ている。これはきつと、税金がある未来。

夢がある。今を生きる私たちが『当たり前前の安心と日常』を守っていききたい。だから、私はこれからも、『税』と生きる。